

アフガニスタン山の学校だより
ばあーる **2017**年号

通算**33**号

第2期支援活動スタート! 2017年アフガニスタン訪問報告

翼(ばあーる)



▲1年前に撮ってもらった写真を手にした新1年生

新たなスタート 第2期に向けて

9月17日、第2期の最初となる総会&報告会が東京で開催されました。会場である武蔵野芸能劇場には台風接近の悪天候にもかかわらず、138名の方々が集まってくれました。会場では、参加者の多くが、その8日前に放映されたE・T・V特集「アフガニスタン 山の学校の記録——マスードと写真家長倉洋海の夢」を見てくれたことを知り、大変うれしく思いました。報告会で、私が上映した写真は100枚。いつもの1.5倍もの量でしたが、どの写真も、子どもたちの成長の証しとして外せないものばかりでした。

そのあと、3年がかりの粘り腰で番組の企画を通してくださった河邑厚徳監督が舞台に立ち、「この素材を元に劇場用映画を制作したい」と語られると、会場からどよめきとも歓声ともつかない声が上がりました。続いて登壇したのは、幾度かゲストとして参加していただいた在日アフガン人の江藤セテカさん。彼女からも、第2期へのエールをいただき、温かい雰囲気の中で集いを終了させることができました。

アフガニスタンから「爆弾テロ」や戦闘のニュースが流れてくるたびに不安に襲われますが、将来への夢を膨らませながら、山道を元気に通学してくる子どもたちの姿を思い起こし、簡単に怯んだり、未来を諦めてはいけなさと自分に言い聞かせます。困難な中にも、希望は確実に存在します。一昨年から大学生になったシャーシアが学校の教壇に立つようになり、今年マリナが同じく教師として子どもたちに授業をしていました。その教室では、15年前に届けた机と椅子が今も大切に使われています。私たちが当初の気持ちを忘れず、さらに子どもたち、そして、現地の人々につながっていきけるような活動をしていきたいと思えます。それがアフガニスタンの復興と平和につながるっていくことを願いながら。

山の学校支援の会

代表



長倉洋海

2017年アフガニスタン訪問報告



今年も長倉代表とともに、森、高橋としてカブール在住のムルサ
ルこと井澤望さんが山の学校を訪問しました。5月31日から6月
4日までの行程を記録した長倉代表のレポートをお届けします。

5月27日午後10時に成田を出発、28日はドバイで一泊し、翌29日午後1時首都カブールに到着。空港の外で待つてくれていた安井さんと合流。彼女の家へ。翌日、ノートや筆記具を小分け袋詰めしたり、交流会用のビスケットなどを購入、準備を済ませる。

5月31日(水)

朝、荷物を車に積み込み出発しようとした矢先、「ドカーン」と大きな音が聞こえた。表に出て、音がした方向を見ると、真っ黒な煙が40、50メートルも上がっている。市の中心、大統領府あたりだ。「自爆テロに違いない」とすぐに思った。どれだけの人が犠牲になったのだろうか。テロはいつ止むのだろうか。そう考えると気持ちが塞ぐ。しかし、パンシールでは子どもたちが待っている。ラマダン(断食日)に入ったので、学校も早引けなのだが、我々の到着を待つて残っていると電話が入っていた。

急いで学校に向かったが、着いたのは昼過ぎ。「子どもたちは朝から食べていないので帰宅させた」とヤシン先生が教えてくれる。子どもたちの顔を見ることができずに残念。故サフダル校長と学校を切り盛りしてきたヤシンが校長になったと聞き、お祝いの言葉を述べると嬉しそうだ。(写真:車の子たち)



泊まる予定のサフダル一家の家へ。家に向かう途中、ゼケルラーを見かけて急停車。昨年、「兄が大学に進学し、家に余裕がないので、自分は軍隊に入って家計を助ける」と話していたが司令官に「死にに来たのか?」といわれ、また裏

切り者によってその部隊全員が死んだと聞いて軍隊は止めたいという。「軍隊には行かせたくない」と話していた母親も妹のナルゲスも安堵したに違いない。「将来は俳優になりたい」というので面食らったが、好きな道が一番と思いつく。明日が大学入試だということ。一年ぶりのサフダル一家訪問。軍隊の荷送をしている長男のサタルもいて、一家全員が揃っていた。夕食後、寝床に入るが、障害のある三男と四男が大きな声で歩き回り、なかなか寝られない。朝、聞いてみると目が離せない2人のため、長女のファトナと次女のシャボナが昼も夜もかきりきりなようだった。「将来は画家になりたい」といつて、毎年、絵を見せにくるファトナがノートを持ってこないで理由を尋ねると、「ほとんど絵を描く時間になかった」と寂しげに話す。

6月1日(木)

朝食を急いで済ませると、車で山の学校に向かう。以前の悪路も改修されて今は20分ほどで学校に着く。子どもたちの登校風景を写真に撮ろうと思っていたが、登校はもう始まっていた。追いつきざまに車から声をかけると、子どもたちは笑顔いっぱいに応じてくれる。学校ではすぐに朝礼が始まった。周辺の五千メートルを超える山はまだ雪をかぶっている。ヒズブークシの山々を背に、子どもたちの元気な声が峡谷に響く。



子どもたちにカブールで買ったお菓子を配ると、みんな笑顔を浮かべる。高学年の子たちは口サ(断食)を守っているの持帰るよっだ。小さな子の中にも食べない子がいる。家で幼い妹や弟に食べさせるつもりな

のだ。

ホラム先生の家に昼食に招かれる。さつきまで、学校で教えていた四女のマリナがご飯を用意している。赤いほっぺで幼かったマリナが高校に通い、そして大学受験の年を迎えている。「絶対に受かって、父親の教育への思いを引き継ぎたい」と話す表情は輝いていた。(写真:父と登校するマリナ)

夜は大学に通いながら、教員もしているシャージャアの家へ行く。家族みんなが出迎えてくれて夕食をご馳走になる。肉ばかりかリンゴやコーラ、ファンタまで用意されていた。「いままで支援があったから学校に通えました」と話してくれた彼女。「弁護士になつて苦しんでいる女性を助けたい」と法学部に進んだが、「いま教師にも魅力を感じている。十人の人を助けるより、千人の子に教えた方がいいのではないかと思うようになった。でもしばらくは両方の可能性を探ってみよう」と話す。そんな彼女の頑張りや何度も目にしてきた。学校で教えた後、山道を2時間かけて下の町まで歩き、そこからスクールバスで30分かけて下流にある大学へ。日没近く大学から戻ると、放牧の牛を小屋に入れて1日の仕事が終わる。家族の朝食も5時から作っていると最近、知った。そんな彼女にプレゼント用に買って来たハンドクリームと装身具を渡そうとするが、「すでにたくさん(支援を)いただいているのでもう充分です」と受け取ろうとはしない。その謙虚さに打たれた。(写真:シャージャアの授業風景)

6月2日(金)

学校が休みの金曜日。早朝から羊を連れたアミンやカティープと山に向かう。昨夜は寝坊しないようにテレビカメラマンのユセフとアミンの家に泊まり込んでいた。アミン一家が暮らすガーウインはポーランドで





も一番高いところにある集落で、標高3000メートル。そこからさらに高い山に登るのは大変だ。息を切らせながらなんと2人について追いかけていく。眺望のきく所で、3人で座り込む。パンシールの山並みと下の村々が目に飛び込んできた。ポーランド川が激しく流れる音がこもって聞こえてくる。澄み切った空気を吸い込む。「こんな贅沢な時間がほかにあるだろうか」と感慨が耽る。キノコや山菜がとれ、色とりどりの花をつけた高山植物が咲き乱れるこの光景をマスクドは愛した。そして、この子たちも同じ思いだろう。

アミンは小学校の頃、一日中、放牧で山に行っていることが多く、満足に学校に行けなかった。それでも頑張りつて高校で学び、大学では農業を学びたいと考えている。農業を継ぎ、家族を支えるためだ。(写真：山菜を頭に載せて)

ガーウィンに戻ると、ナイマの家を訪ねる。足の悪い母親の手伝いのために中学1年で学校を中退してしまっただけだが、いつも私たちの訪問を楽しみに待っていてくれる。私たちにいつも、「学校に行きたかった」と話す。でも、すぐに笑顔を取り戻し、私たちを精一杯にもてなしてくれる。

6月3日(土)

同行してくれた安井さんとユセフが一足先に帰るといふ。その前に、恒例のスイカ割り大会を開く。子どもたちの突き抜けたような笑顔と甲高い歓声がポーランドの山間に響く。天まで届くかもしれない賑やかさに、天上のマスクドも微笑みを浮かべていることだろう。長い付き合い合

いになる安井さんとユセフ、2人もマスクドが取り持つてくれた縁だ。マスクドは逝ってしまったが、今も私たちの心の中に確実に生き続けている。(写真：スイカ割り)

6月4日(日)

学校での最後の日。生徒たちの顔写真を撮り、



新校舎から旧校舎に移動した図書室の本棚を整理し、教職員と話をした。訪れてくれた村人、学校の子どもたち、誰もが、「来年も来てね」「待っているよ」と声をかけてくれる。そんな時、駆け寄ってきた4年生の男の子が私の手に100アフガニー(150円)札を握らせた。押し返そうとすると、「いいから、いいから」というのではないか。「これじゃ逆だなあ」と思いながら、「この子なりのお礼の気持ちなのだろう」と思い直し、ありがたくいただくことにした。支援を始めた最初の頃、バケツ一杯のヨーグルトを持ってきて、「日本の支援者の方に届けて」と言った幼い女の子がいたのを思い出した。ポケットにクルミや干しぶどうを入れてくれた子もいた。みんな、恩返しをしたいのだ。でも、お礼を言いたいのはこちらだと思ふ。この地の人々と出会って、私は故郷とは何か、故郷に何ができるのか問い返すことができた。

何度も見て、見慣れているはずのポーランドの光景がとても眩しかった。きっとまた来るに違いない。車の外では、子どもたちが手を振っている。



成長した子どもたち



①カティーフ 水泳、乗馬、体育とスポーツ万能、楽器の演奏も素晴らしい。現場監督、カメラマンと夢は変わり、いまは医者になりたいとのこと



③ゼケレラー 心優しく穏やかな子。昨年「軍隊に行き家計を助ける」と話していたが、大学進学をすることに。今年、タハール大学農学部合格



②アミン アスラム一家のハンサムボーイ。羊の放牧のため、学校を休むことも多く、落第を経験。来年は大学受験。農学部にいきたいという



誰だかわがるかな？



④シャージャ 寡黙だが、とてもしっかりしている。頑張り屋さん。将来は弁護士にとパンシール大学法学部に進学。昨年からの山の学校の教員も務める

*夏も終わり、カブールも秋本番がやってきました。今年も昨年以上に、国内の治安の不安定さを隠せないアフガニスタンです。国連は、2017年1-9月の空爆による一般市民の死傷者数が466人となり、2016年より52%増加したと報告しています。自爆テロや戦闘の巻き添えなども含めた市民全体の死傷者数は、8019人で、昨年より6%減少しました。

8月にアメリカのトランプ大統領がアフガン新戦略を発表。その後、国内の主なテロ組織「イスラム国」やタリバンに対する空爆が強化され、誤爆や巻き添えなどでますます死傷者数は増加するものと見られます。空爆死傷者の3分の2以上が女性や子どもである点も懸念されます。

さらには、イスラム教シーア派の礼拝所をねらった自爆テロがカブールで起こり、礼拝中の罪のないアフガン人が50人以上殺害されるという事件が起こったかと思いきや、ロケット弾が「グリーンゾーン」といわれる大使館が集まるエリアに落ちたり、一向に落ち着かないアフガニスタンです。北部クンドゥズやガズニ、パルワン州などもタリバンとの戦闘が激化し、多くの兵士の犠牲も絶えないのがつらいです。犠牲者のご冥福をお祈りします。

そんな中、テレビの娯楽番組やサッカーのプレミアリーグのナイトゲームが40年ぶりに行われるなど、それだけを見るという平和な国に見えるのです。が、時折起こるテロ事件が、悲しいことに、やはりこの国がまだ平和でないことを教えてくれます。

パンジシールは、晩秋を迎え寒い冬目の前。サンダリと呼ばれる炬燵のシーズン到来です。冬を前に人々は冬支度に、わが家も傷んだ家の修理に大忙しです。今年も残すところあとわずか。どうか、アフガニスタン、そして世界の人々が平穏に過ごせますようお祈りください。

アフガニスタン・カブール 安井浩美



安井浩美 ムルサルさんの カブール通信



▲アフガニスタン東部ナンガハル州で、乗っていた車が誤爆され、父親と兄弟を含む11人が死亡。彼女だけが一命をとりとめた。



*参加された方々は調理実習やアフガニスタンの料理や習慣、文化の実演紹介、子どもたちの映像を楽しんでいました。



*9月17日(日)東京・武蔵野市にて第2期第1回総会・現地報告会を開催しました。報告会終了後は、長倉代表の写真集の販売や、「山の学校」運営委員の解説付きでこれまで撮りためた動画上映も行いました。E T V特集の放送時間には収まり切らない「山の学校」の子ども

イベントを開催しました

- ▶2月7日(火)アフガニスタン料理教室/武蔵野市民会館調理室にて。
アフガニスタンから一時帰国中の安井浩美さんを講師にお迎えして(写真左)
- ▶3月18日(土)アフガニスタンを『食べて』『見て』もっと知ろう/東中野ろまらくだにて(写真下)
- ▶4月2日(日)活動写真 アフガニスタン山の学校の子どもたち/東京都写真美術館1階ホールにて



事務局より

- ▶2018年度の会費の振込用紙を同封いたしました。ご入会されたばかりの方もおられますので、期日は設けていません。2018年度内に納入をお願いいたします。
- ▶不要切手や書き損じはがきのご提供、ありがとうございます。今回の発送にも早速使わせていただきました。今後ともご協力をお願いいたします。
- ▶住所変更の場合は、お手数ですがメール、FAX、はがきなどで事務局までご一報ください。
- ▶今年は東京のほか、会員の方で協力で名古屋で現地報告会を開催しました。お住まいの地域で報告会やイベントの開催にご協力いただける方は、どうぞ事務局までメールでお知らせください。
- ▶この秋から、大学に進学した卒業生4人に奨学金を支給することになりました。これは会の活動費とは別予算で、お2人の方から今後4年にわたる支援のお申し出があり実現しました。なお、奨学金支援にご関心がある方は、奨学金専用メールアドレスschol.yamanogakko@gmail.comまでお気軽にお問い合わせください。



アフガニスタン山の学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会ったパンシール渓谷ボランデ村の子どもたちの教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年4月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたって活動を続けてきました。その後2017年3月まで活動を延長。4月より第2期支援活動をスタートしました。



総会のご報告

たちの笑顔や、長倉代表や運営委員のこれまでの13年間に、初めて報告会に参加した人からも熱い共感の声寄せられました。(総会で配布した2016年度の会計報告を会報に同封します。)

アフガニスタン山の学校だより ばあーる2017年号/通算33号

発行日:2017年12月17日 発行:アフガニスタン山の学校支援の会
〒187-0032 東京都小平市小川町1-1071-15 比留川 気付
FAX & 電話:042-345-7805 E-mail▶info_yamanogakko@yahoo.co.jp
http://www.h-nagakura.net/yamanogakko
編集・発行人:長倉洋海/題字・イラスト:近藤理恵/デザイン:桂川 潤
編集実務:重野陽子・三輪ほう子/印刷:藤田印刷株式会社